平成27年度　　嬉野市立久間小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
いきいき久間っ子の育成	≪思いやりの心をもち、自分で考え、進んで活動する子どもを育てる≫ ①「学力の向上」・・・工夫して学ぶ子プロジェクト 〇伝え合い学び合う活動を通して、書く力や話す力などの表現力を伸ばす 〇ICT利活用による授業実践の積み上げる ②「運動への親しみ」・・・強くて逞しい子プロジェクト 〇自分なりに楽しめる日常的なスポーツとの出会いを通して運動習慣を身につけ、体力の向上を図る ③「道徳教育の推進」「特別支援教育・教育相談の推進」・・・心やさしい子プロジェクト 〇心に響く道徳の授業づくりを通して道徳心の向上を図る 〇人権教育とリンクした道徳教育の授業実践 〇特別支援教育の推進体制づくりに取り組む ④「地域連携の推進」・・・地域人材、地域素材を生かした実践の充実 〇久間コミュニティーや中学校と連携した授業・活動の充実

達成度
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分であ

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①「工夫して学ぶ子」育成に向け、自分で考え創り出す活動の実践

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）<「4」「3」とは「学校評価アンケート」での概ねあてはまる以上>	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	読書活動の充実	・年間「100冊読書」達成する児童を80%以上にする。	・朝の時間に読書タイムを行い、静かな授業の始まりを迎える。 ・週末読書や読書回覧板（低学年）に取り組み、家庭での読書の習慣化を図る。 ・図書館祭りや読み聞かせを実施する。	A	・100冊読書80%-進んで読書をしている。 :児童　4（46．5%）　3（34．3%）　平均3．22（80．8%） :保護者　4（37．9%）　3（55．9%）　平均3．32（93．8%） ◎朝読書など読書活動推進の取り組みで習慣化している	・学年に応じた本選び、図書委員会による読書推進活動、学級文庫の充実など、読書指導の工夫を進める。 ・魅力ある図書室づくりを心がけ、児童が読みたい本を充実させ、足を運びやすい環境を整備していきたい。
		家庭学習習慣の確立	・家庭学習に取り組む方法が分かり、自ら家庭学習に取り組めると自信を持って回答する児童を80%以上にする。	・家庭学習チェックシートに取り組むことで、家庭学習指導の徹底、学習準備の徹底や学習習慣の確立を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、学年に応じた学習時間や内容の充実を図る。 ・家庭学習（自学）ノートコンテストを実施し、更なる内容の充実を図る。	A	・家庭学習への取り組み80%-毎日、家で勉強している :児童　4（79．8%）　3（13．9%）　平均3．73（93．6%） :保護者　4（27．3%）　3（50．3%）　平均3．04（77．6%） ◎学校塾に通っている児童も多く、家庭学習（宿題を含む）は、よくできている。全校で習慣化できてきた。	・学習塾、家庭学習については、「継続」と「徹底」の大切さを家庭と連携しながら児童に投げかけ、取り組みの徹底を図る。 ・家庭生活チェックシート、自学ノートコンテストの実施を継続する。
		獲得した知識・技能を活用し、表現する力の育成	・自分の考えをノートにまとめたり、発表したりすることができると回答する児童を80%以上にする。	・授業の中に自分の考えをまとめる時間や伝え合う時間を確保し、表現することの大切さを実感させながら表現力の育成を図る。 ・研究授業等を設定して、児童の表現力を育成する指導力の向上を図る。	B	・自分の考えをまとめたり発表したりする80%-自分で考えたり発表したりしている　4（29．5%）　3（41．6%）　平均2．95（71．1%） △自分の考えをノートにまとめる活動はできているが、だれもが自信を持って発表できるところまで至っていない。	・日々の授業の工夫改善（児童が自分の考えを自信を持って発表できる場、活躍する場を工夫する授業実践に取り組む）を行い、話し合い活動を意図的に取り入れながら、授業を活性化させていきたい。
	●ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育の推進	・教職員のICT利活用教育に関する基本的なスキルの向上を図る。 ・電子黒板やICT機器を活用した授業を積極的に行う職員を90%以上にする。	・電子黒板やICT機器等について、校内研修会を計画的に行うだけでなく、支援員を活用してミニ研修会を随時設定する。 ・ICTを利活用した実践の情報交換を行う。	A	・ICT利活用90% （職員）4（41．7%）3（50．0%）　平均3．3（91．7%） ◎電子黒板が普通教室に整備されたことで、躊躇なく（準備等）活用する機会が増えるとともに、その活用効果が実感できた。 ◎情報支援員が相談しやすいので、来校時だけでなく、他校へも積極的に支援を仰ぐ姿が増えている。	・今後も、指導事例等、職員間はもちろん、情報支援員との情報交換を進めながら、実践力を高めていきたい。
	〇子どもの活動づくり	学級活動の充実	・係活動や当番（日直・掃除・給食）活動で「責任を持って自分の役割を果たしている」と回答する児童を80%以上にする。	・学級において、仕事を担う意義を理解させ、計画・実践・ふり返りの時間を保障し、活動の支援や助言を行う。 ・係活動で、当番的活動と自主的活動を意識させて取り組ませる。	A	・責任持って自分の役割を果たす80%-係や当番の仕事を責任持ってしている4（59．5%）3（30．6%）　平均3．49（90．2%） ◎係や当番の活動は、責任を持ってできている	・係や当番活動、委員会活動において、児童が活動の意義を実感し、目的や活動内容を決めさせ、達成感や成就感を味わう経験をさせながら、自主的活動を目指していく。

②「強くて逞しい子」育成に向け、進んで運動に親しむ活動の実践

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくり	望ましい生活習慣の形成	・毎日必ず朝食をとる児童95%を目指す。 ・目標の就寝時刻に寝る児童を90%以上にする。	・毎月、保健だより・食育だよりを発行し病気の予防法や食事の大切さを保護者に伝える。 ・朝食をバランスよく食べることや睡眠の大切さを保護者や児童に伝える。 ・毎朝の健康観察時に児童の就寝時刻と朝食喫食について調べる。 ・年に3回生活習慣チェックシートを配布し、生活習慣を見直す機会を設ける。 <就寝時間（布団に入る）の目安：低（9:00）中（9:30）高（10:00）>	B	・毎日必ず朝食をとる児童95%を目指す。 児童：4（90．2%）　3（7．5%）　平均3．88（97．7%） 保護者：4（84．5%）　3（12．4%）　平均3．81（96．9%） ・目標の就寝時刻に寝る児童を90%以上にする。 児童：4（52．6%）　3（31．2%）　平均3．32（83．8%） 保護者：4（29．2%）　3（34．2%）　平均2．88（63．4%） △朝食喫食率は4、3の割合が中間評価と比べ、4の割合が減っている。 ◎就寝時間については4の割合が増え、1の割合が減っている。ただ、朝食と就寝については、家庭での状況にもかかわらず、児童と保護者の意識の違いが若干見られる。	◎朝食喫食、就寝時刻については、今後も、継続して朝食、睡眠の大切さを指導していく。また、保護者にもお便りなどで状況を伝えながら、互いに連携して習慣付けさせる。
		運動習慣の定着化	・昼休みに外に出てよく遊ぶ児童を85%以上にする。	・いろいろな運動を紹介し、児童に奨励する。（縦割共遊、がんばるマラソン、久間リンピックチャレンジランド） ・外遊びを奨励する。（前期は学級で、後期は全校的取り組みを行うようにさせる。） ・天気のよい日は外で遊ぶように放送で呼びかける。	A	・昼休みに外に出てよく遊ぶ児童を85%以上にする。 児童：4（58．4%）　3（28．3%）　平均3．20（86．7%） ◎昼休みの外遊びについては、中間評価に比べ良くなった。久間リンピックや、ドッジビー大会などを計画し、必ず外に出ないといけないような場を設けたのがよかった。	〇天気の良い日は外で遊ぶように放送を入れたり、大縄大会や久間リンピックなどを継続して計画したりしながら、外に出て活動する機会を増やしていくことで外でよく遊ぶ児童の育成を図る。 〇体育委員会でなぜ外遊びをしない児童が多いかを考えさせ、改善していく。（縦割で遊ぶ計画を立てたり、遊びを紹介したりする）
	〇子どもの活動づくり	縦割り活動・クラブ活動の充実	・縦割り活動で「他の学年の人と楽しく活動できた」と回答する児童を80%以上にする。 ・クラブ活動で「他の学年の人と協力して活動できた」と回答する児童を80%以上にする。	・異学年で共通の興味・関心を追求させながら、活動計画や準備を事前に知らせたり、活動中の進行等をしたりする自主的な活動の場を保障する。 ・異学年で交流する楽しさを味わえる、場と時間を保障する。	A	・縦割り活動で「他の学年の人と楽しく活動できた」と回答する児童を80%以上にする。 児童：4（79．2%）　3（16．2%）　平均3．74（95．4%） ◎縦割遊び、クラブ活動は楽しみにしているようだ。評価も中間と比べ4、3の割合が増えた。	〇次年度も継続して、運営委員会を中心に、児童自ら縦割り活動を企画したり、やり活動を募ったりしながら、児童が主体的に活動する場を保障していきたい。

③ 「心やさしい子」育成に向け、人の気持ちを考える活動の実践

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	道徳教育の推進	・道徳教育を校内研に位置づけ、心やさしい子の育成と、職員の研修の充実を図る。 ・年1回以上、道徳の授業を公開する。（7月の授業参観「ふれあい道徳」）	・道徳の授業研究会を全学級で実施する。 ・道徳の教科書を活用する。 ・「心やさしい子」プロジェクト部会からふれあい道徳を提案する。 ・ふれあい道徳の実施にあたっては、地域人材の積極的活用や「学校便り」、「学級通信」等を通じた情報発信に努め、広く道徳教育への理解を図る。	A	・道徳を計画的に実施、心やさしい子の育成する。 職員：4（40%）3（60%） 平均3．4（100%） → 保護者：4（31．1%）3（62．7%） 平均3．25（93．8%） ↑ ◎本年度、道徳教育を校内研究に位置づけたことにより、職員の意識が変わり、計画的な授業実践が行われた。	○年間35時間の道徳の時間の授業を年間計画に基づき児童の心に響く授業実践をしていくことで、心やさしい子を育成していきたい。 ○次年度も校内研を「道徳教育」とし、計画的な校内研修の推進を図る。
		生徒指導の充実	・人の気持ちを考えることができると回答できる児童、80%以上をめざす。 ・自分からあいさつができる児童が、児童・保護者アンケートで 80%以上をめざす。	・あいさつ、そうじ、思いやりの3点について月ごとに具体的なめあてを設定し、プロジェクト部会を中心に達成状況を評価しながら年間を通して学年に応じた指導を行う。	A	・友達の気持ちを考えた行動をする。 児童：4（51．4%）3（43．4%） 平均3．46（94．8%） ↑ ・進んであいさつをする。 児童：4（66．9%）3（24．9%） 平均3．64（94．8%） → 保護者：4（30．4%）3（48．4%） 平均3．09（78．9%） ↓ ・生徒指導力の向上させる。 職員：4（16．7%）3（83．3%） 平均3．2（100%） ↓ ◎生徒指導については、月目標を全校朝会で知らせたり、達成状況について話し合いを持つことで、日常の指導に生かすことができた。	◎学級指導や生活場面などで折に触れ、児童に月目標を知らせることで意識化を図るとともに、「その時、その場での指導」の徹底を図る。 ◎「あいさつ」については「目を見て、はっきり、笑顔で」の具体的モデルを示し、よくできた児童に対する称賛の機会を増やす。 ○「あいさつ、そうじ、思いやり」の3点については、今後も「共通理解・共通実践」を図れるよう、心やさしいプロジェクトを中心に達成状況等について評価と発信を行っていきたい。
		特別支援教育及び教育相談体制の充実	・特別支援教育について理解し、取り組んでいる職員を90%以上にする。 ・気にかけておきたい子の実態、支援の在り方について共通理解を図り、実践している職員を90%以上にする。	・特別支援教育に関する研修会を実施し、特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制を確立する。 ・毎月の「子ども支援会議」で支援の必要な児童の実態についてスクールカウンセラーを活用しながら情報交換し、支援方法の検討をする。	B	・特別支援教育及び 教育相談体制の充実させる。 職員：4（33．3%）3（50．0%） 平均3．2（83．3%） ↑ 保護者⑦：4（38．5%）3（54．0%） 平均3．31（92．5%） ↑ ◎毎月「子ども支援会議」を持つことで、支援を必要とする児童について共通理解をし、児童の特性や変容を把握するとともに、児童理解を深め、児童一人一人に応じた支援体制の充実を図ることができた。また、巡回相談やスクールカウンセラーなど、専門機関との連携を図り、より良い支援について研修を深めた。	○今後も研修の機会を設け、職員の特別支援教育及び教育相談についての知識を深め、支援する技量を高める。 ○子ども支援会議を充実させて児童理解を図り、児童一人一人の実態に応じたきめ細やかな支援ができるようにしていきたい。 ○引き続き、巡回相談やスクールカウンセラーなど、専門機関との連携を深めていくことで、より良い支援につなげるようにしていきたい。
	●いじめ問題への対応	・いじめのない学校づくり	・人権教室、児童アンケート等を行うことにより、いじめを許さない意識付けを図り、早期発見・早期対応をしながらいじめ「0」をめざす。 ・満足型の学級づくりに100%取り組む。	・児童のアンケートを年2回実施する。（7・12月） ・児童のアンケートを基に児童との面談を実施し、いじめの早期発見、よりよい解決に努める。 ・「仲間・連帯」「やさしさ・思いやり」をテーマとした人権集会（6月、11月）を実施し、児童の心を耕していじめを許さない心を育む。 ・ハイパーQUの効果的な活用を図るために研修会を実施し、ハイパーQUを実施して、児童の実態把握を行うことで支持的風土のある学級経営を行う。	B	・学校が楽しい、心配事は相談する。 児童：4（67．1%）3（27．2%） 平均3．6（94．2%） ↑ 児童：4（48．6%）3（32．4%） 平均3．23（80．9%） ↑ ・いじめ防止、早期発見に努めている。 職員：4（41．7%）3（58．3%） 平均3．4（100%） → ・子どもは人の気持ちを考えた行動をしている。 保護者：4（19．3%）3（70．8%） 平均3．09（90．1%）【新項目】 ◎いじめの防止・早期発見、早期対応については、本校「いじめ防止基本方針」にのっとり、相談箱の設置やアンケートの実施、日々の観察・聞き取りを行うなど努めてきた。また、「いじめ防止対策委員会（7月）」において、外部からもご意見やアドバイス等をいただいた。さらに、「校内いじめ防止対策委員会（12月）」においても、今後の対応について共通理解を図った。 ◎ハイパーQUの実施とハイパーQUに関する研修会（8月）を行ったことで、児童の実態把握をし、満足型の学級づくりに生かせた。	○ハイパーQUについては、年間計画に位置づけ（6・12月実施）、学級集団の現状把握と改善、ハイパーQUに関する研修会等を生かして、より良い学級づくりを進める。また、児童が次の学年になったときに、申し送りを確実に行い、新年度からの学級経営につなげていく。 ○いじめについては、どの学級でも起こりうることという意識のもと、常日頃からいじめ防止に努めていく。また、相談箱の設置やいじめに関するアンケート（2回目）を行い、いじめの早期発見に努める。 ○今年度は、5年生が総合の時間に学習したことを生かした発表を行ったことで、人権への意識が高まったので、今後も児童主体の内容を実施したい。

④保護者・地域との連携を深めるコミュニティー活用の推進

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○保護者・地域との連携	保護者・地域との連携とコミュニティーによる学習支援体制づくり	・保護者の授業参観率を80%以上にする。 ・コミュニティーによる学習支援体制を活用した授業や活動を実施する。	・学校だよりやHP等で早めに授業参観日や懇談日を知らせ、保護者が計画的に参加しやすいようにする。 ・各教科や総合的な学習の時間における年間計画を作成し、学校運営協議会を活用してコミュニティーと連携強化を図りながら、地域の教育力を生かした取組みを推進する。	A	・保護者の授業参観率　PTA総会授業参観-80%（昨年82%） 7月日曜フリー授業参観- 120%（昨年10月実施128%） 11月嬉野教育の日- ◎保護者の授業参観率は、昨年並みの状況で、ほぼ目標を達成している。 ・「私は、コミュニティーや地域の教育力を活用した実践を行っている。」 4（45．5%）-3（45．5%） 平均-3．4（91．0%） ◎学校教育活動とリンクした久間コミュニティーとの「地域連携の教育活動計画」を作成しているため、無理なく、連携活動ができている。また、「地域人材」を活用した授業実践によって、体験的学習や指導が可能となり、児童の学習意欲は自ずと高まり、豊かな学びとなっている。 ◎事務局と学校側コーディネーター（窓口：事務職員）との連絡が密にできていることで、職員の負担軽減にもつながっており、職員の意識も昨年度と比べ上昇してきている。 △体制づくりが整ってきている一方、家庭・保護者との連携活動を推進していく必要がある。	◎授業参観の出席率をさらに上げるため、保護者が参加しやすい日程や早め早めの確実な連絡など、工夫をしていく。 ○「地域連携の教育活動計画」の確実な実施をするため、久間コミュニティーとの地域連携システムを年度当初に確認するとともに、保護者にも参加を促す。 ○児童、保護者アンケートにおいて、地域連携の効果を見とる評価項目を入れて、評価とともに啓発を図りたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○学校経営方針	本年度の学校目標、重点目標の周知 職員の学校運営への参画	・保護者に周知し、おおむね知っている人が90%以上になるようにする。 ・学校運営に参画しているという意識が持てたと答える職員を90%以上にする。	・学校だより、PTA総会、学級懇談会等で周知し、具体的な取組を説明する。 ・各プロジェクトチームで評価項目・方策を作成・実践し、職員の参画意識を高める。	A	「学校目標（く・ま・っ・こ）を知っている。」 児童：4（76．9%）3（17．3%） 平均3．53（94．2%）（中間比+4%） 保護者：4（30．4%） 3（49．1%） 平均3．08（79．5%）（昨年比+2.7%） 「学校（私）は、学校（学級）目標を達成するための取組を行っている。」 職員：4（50%） 3（50%） 平均 3．5（100%）（中間比±0） ◎PT部会による中間評価の分析、対策、各行事や校務分掌の取組等の企画・提案など、組織的な取組が定着してきたことが、成果の大きな要因と考える。 ○今年度も2学期の始業式で各PT部会から、重点的に取組む内容を児童に示す場を設けたことで、児童への意識化、職員への自覚化につながっている。 ○保護者の理解は、80%まであと一息だが、届いていない。地域連携活動の啓発と絡めて、周知策を講じていきたい。	◎前年踏襲にならないよう、前年度の反省のもとに企画・立案をしていくことを再確認し、各プロジェクトの取組と保護者への周知を重ねていきたい。 ○PTA総会、各行事等において、学校の教育目標、教育方針等を随時説明したり、HPや学校・学級だより等を活用したりしながら、地域も含めて地道な啓発に取り組んでいきたい。
教育活動	○小中連携教育	小中連携教育の推進	・9年間を見通した基本的生活習慣、及び、学習習慣の確立を推進する。 ・「ろくさんプラン」の分科会ごとに、スリーステップで取り組む内容を把握し、100%実践する。	・小中学校の生徒指導方針の情報交換を行う。 ・小中一貫が可能な授業規律の共通理解を行う。 ・小中職員相互の授業交流（授業参観・出前授業）を行う。	B	「私は、小中連携を意識した教育活動を行っている。」 職員：4-18．2%　3-63．6%　 平均：3．0（81．8%）（前年度比+12．6） ◎6月と12月に塩田中校区で合同研修会を行った。今年度から4分科会に分かれて情報交換及び3ヶ年の計画立案（3ステップ）を行った。後日、各学校で各分科会の情報交換をしたことで、共通理解を図ることができた。 ◎2月の塩田中学校説明会で模擬授業や部活動体験ができたことは、中1ギャップの解消につながると思われる。 ◎ノーテレビ゜、ノーゲームデーを毎月1日に設定し、取組みの主旨や家庭での協力について周知を図った。実施の有無についても調査し、意識して取組む児童（家庭）が増えている。 ・小中間の授業参観や出前授業等については、卒業式歌の指導を3月に実施する予定である。	○各学校の生活や学習のきまり（約束事）等を集め、生徒指導及び学習指導の参考にしながら連携を意識した指導を行う。 ○校内研修で研究授業を行う際には、事前に予定を知らせ、お互いに参観できる機会を増やす。 ○コミュニティスクールでの「ゲストティーチャ、○○サポーター」についても、活動内容や人材バンクの情報交換をし、本校の活動に活かしていく。
	●小学校低学年の学習環境の改善充実	学習習慣や生活習慣の確立	・話を最後まで静かに聞くことができる児童を85%以上にする。 ・学用品の忘れ物がない児童を 85%以上にする。	・日々の授業で話を聞く態度について、随時指導をする。 ・自分のことが相手に伝えられるように話し方の指導をする。 ・「べんきょうのやくそく」を配布し、家庭学習の習慣化を図る。 ・「家庭学習チェックシート」を実施し、家庭と連携を図りながら学習習慣や生活習慣を確立させる。 ・学用品の忘れ物については、個別に指導し、家庭との連携を図る。	A	・先生の話をよく聞き授業を受けている。 児童：4（63．9%）3（31．1%） 平均3．59（95．1%） ◎最終評価や低学年担任の観察においても向上が見られた。 ○「自分で考えたり、発表したりしている（3・4）」は78．7に留まっているので、作文や日記の発表など、できるだけ全体の前で話す機会を設けていきたい。 △チェックシートの取組期間以外や曜日によって就寝時刻が守れていない日がある。 ◎宿題については全員ほとんど毎日提出できており、学用品の忘れ物については、個人差はあるが全体的には良好である。	◎基本的生活習慣については、学級通信で家庭に向けて啓発を図り、個別に指導が必要なときには、保護者との連絡を密にする。 ○日々の授業の中で、話し方、聞き方のモデルになる児童を取り上げ称賛するなど、繰り返し注意喚起を行うことで、意欲、態度の向上をめざす。

4　本年度のまとめ ・ 次年度の取組

・3つのプロジェクト構成で学校評価の項目、目標、方策等を検討し、全職員が評価に関わりながら運用したことで、学校運営への参画意識が一層高まってきた。また、児童への指導に関しても、学期の初めに、各プロジェクトから目標や方法を説明するなど、学校全体で取り組む体制ができてきた。
・校内研修では、これまでの算数科で培った成果を生かしながら、「道徳の時間」の研究に取り組んだ。初年度ということで、まずは、児童の心に響く授業改善を目指し、全学級で公開授業を行い研修を進めることができた。
・家庭学習、生活習慣、ノート指導など、基礎的な学習習慣を土台に、様々な取組の「継続」「徹底」ができているので、その成果が学習状況調査等に見られる学力向上につながった。
・運動、食育の大切さを指導しながら、水泳、マラソン、大縄、縦割共遊などの活動を計画的に実践していることで、児童が運動に親しみ、健康な体づくりをしていこうという意識の高まりにつながっている
・2年目を迎えたコミュニティスクールは、久間コミュニティとの連携を密にし、多大な協力を得ながら実践を重ねることができていることで、児童の豊かな学びにつながっている。地域連携教育に関する職員の意識も高まった。
・電子黒板が各クラスに導入され、授業や行事等において積極的な活用ができている。各学期、長期休業中における情報交換や実践例の研修等を進めて、ICT利活用教育の利点に関する研修を重ねることもできた。

・より的確な評価を行うために、目標達成基準やアンケート項目の見直しを行うとともに、学校HPをさらに充実させたり、学校便り、学級便り等々で学校目標に焦点化した児童の様子を知らせたりして、学校運営に関する理解を求めていきたい。
・小中連携や交流については「ろく・さんプラン」のもと、できることから着実に連携し合い、これまで以上に小中連携に取り組んでいきたい。
・軌道に乗ってきたコミュニティー・スクールだが、無理のない運用に加え、家庭、保護者を巻き込んだ教育活動を展開し、児童の豊かな学び、安心できる教育環境づくりに努めていきたい。また、実践するにあたり、日程調整、活動のねらい等について、これまで以上に事前打合せを充実させたい。さらには、児童の積極的な地域行事への参加を促し、地域で育てる環境づくりにも寄与していきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目